

報告2

民具研究の視点から



久保 禎子

(一宮市尾西歴史民俗資料館・学芸員)

一宮市尾西歴史民俗資料館の久保と申します。よろしくお願いたします。

本日はこのようなアカデミックな場にお招きをいただいたのですが、いつも地に這うような仕事をしている私がここに立っていていいのだろうかと思ひながら参りました。今日は、私の経験を踏まえて少しだけお話をさせていただこうと思います。

## ■学び歩んだ研究の入口

私はもともと考古学の出身です。そのため、民俗学を学生のころからずっと勉強して、「私は民俗学専攻です」と民俗担当の学芸員として自慢できるような人間ではありません。私が若いころ、ある民俗学の先生から「最近、考古学専攻の人で民俗担当を博物館でしている人がいる」と批判的に言われたときに、がっかりとしたことがあります。

ただ、そのころは思っていなかったのですが、長い間仕事をしていると、両方の立場から眺めることによってわかってくることがあるというのを感じています。

何かというと、私が最初に考古学の研究室の門をたたいたのは18歳のときなのですが、最初に私の恩師が読むようにと下さった本は、考古学の本ではないのです。例えば、森浩一先生の本を読みなさいではなくて、今西錦司先生の本を読みなさいと言われました。

最初は「この人は誰？」という、高校は進学校でしたので受験のことしか考えていなくて、考古学も生態学もわからず、知らないまま読みました。岐阜大学で学長をされた生態学者の今西先生です。この先生の本を読む中で、生態学というものを初めて見聞きするようになりました。

その後、もう一つ指導教官に言われたことが、「どこでもいいので博物館あるいは資料館と呼ばれているところに行きなさい」ということでした。貧乏大学生ですから、アルバイトでやっと稼いだ2~3万円のお金を使って、博物館や資料館に、といっても遠くには行けませんが、見に行きました。

当時、美術館というのは頭の中に全くないので、博物館や資料館に行くわけですが、その展示が今と違うところは、資料がたくさん置いてあるところが多かったことです。

でも、一つだけ、ここで強く言えることがあります。そこには、レプリカはありませんでした。今では、レプリカや複製品が展示の中にたくさん使われるようになりました。当時は、そういうものをつくる予算ももちろんありませんし、必要も感じなかったと思います。だからこそ、本物がいっぱい、手で触れるような距離で置いてありました。民俗資料については、もう説明も何もありません。分類もしてありません。ただ、衣食住という大きなカテゴリーで並べられているところもたくさんありました。

しかし、今も思うのですが、本物が出す力というのはすごいのです。南山大学の人類学博物

館もそうなのですが、本物がいっぱい、手に取れるところに並んでいる。非常に熱い力です。これは、永遠に続くものだと私は思っています。

その後、19歳のころです。民俗学専攻の方はご存じだと思いますが、下野敏見先生という、南九州の民俗文化研究をされていた鹿児島大学の先生に、種子島の調査と一緒に行かないかと誘っていただきました。当時、鹿児島大学法文学部はすごいところで、18歳の学生から院生まで連れて、さらには他大学の先生方や学生まで一緒に、種子島の調査を10年以上続けられ、それを報告書にされています。

当時の私は19歳ですから、考古学ですら、ましてや民俗学の概説、概論など何も勉強していません。もちろん、図面もまだ描いたことがありませんでした。そういう人間に声を掛けていただき、嬉しくてついていってしまったのです。ところが、帰ってきてレポートを書いたら、報告になっていません。文学作品、そんな立派なものではないです、物語のようなものを書いてしまい、先生にずいぶん叱られました。そこから私の暗い人生、ではなく、明るい人生が始まります。

叱られて、しばらくは落ち込むわけですが、書き直した報告を掲載してあるのがこの報告書（下野編 1997）です。

調査地の中心は、種子島の西之表市というところですよ。衛星が打ち上げられるところは、一番南側の南種子町になります。30数年前には信号が1つしかなく、その島の西海岸をずっと歩き続けて、中種子町まで歩きました。誰も知らない場所で、ピンポンという呼び鈴もないようなお宅に「あの一」と言いながら入って行って、「カジキの漁についてお聞きしたいのですが…」と、民俗調査の方法もきちんと学ばず、見よう見まねで話を聞きました。

今思えば、恐ろしい話です。突然、知らない女の子がやってきて、話を聞くわけですよ。当時は女の子でしたので…。当時の日本というのはのどかでした、日本人は優しくかったですね。「お前は誰だ。帰れ!」とは言われません。「じゃあ、まあ、入れや」と言われて家に入れていただくよ、ちゃぶ台に黒砂糖とカジキの刺身が並んでいるわけですよ。会ったこともない人間なのに、「まあ、食べて」と言われて、岐阜県育ちでカジキの刺身などあまり食べたことない私は、目をキラキラさせながら食べさせていただきました。そのとき、「ああ、こういう場所もあるのか」と、それまで出会ったことのない人に触れ感激をしました。そこで初めて私は、民俗学と聞き取り調査を実地で学びました。誰から教えられたわけでもない、ノウハウがあるわけでもない、マニュアルがあるわけでもない。当時は、ただ自分の言葉で自分の聞きたいことを表現することしかできなかったため、その方法で調査を続けました。もちろん、下野先生や他の先生方、学生の皆さんと一緒に調査させていただく際に、その手法を学ばせていただきました。実測図も描いた

ことがないのに、初めて描いた図面です(写真1)。しかも、図画工作の成績は小学校からずっと悪く、苦勞して描きました。

その後学部に進み、そこで漁業を研究することにしました。私の人生の中で、生活でも研究でも、一番真ん中に筋としてあるのが、川や海、そして漁業への思いです。

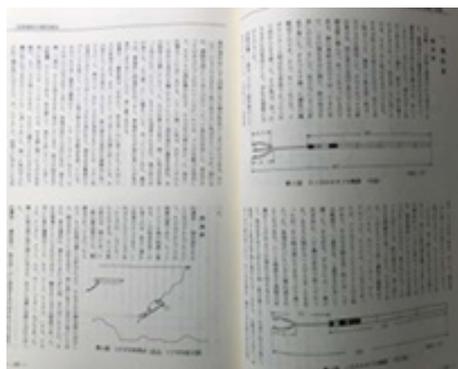


写真1 『西之表市の民俗・民具』西之表市教育委員会、1997

### ■考古資料と民俗資料(民具)

考古資料と民具は、本当は同じモノです。出土した桶は考古資料として、市民から寄贈された桶は民俗資料(民具)として博物館に収蔵されますが、もともとの分類は同じで、桶です。

そこで、私は考古資料や民俗資料(民具)を通して、時代を縦軸にモノを研究していこう、人の暮らしの変化を明らかにしていこうと思いました。その中心にあったのが、漁業、漁具漁法です。

貝塚から出土した貝類や魚骨は一見ゴミに見えます。縄文時代の人びとにとってはもちろんゴミではありませんが、後の人びとが廃棄したこれらも、私たちにとっては宝の山です。その中には、道具や貝殻、魚骨だけでなく、米や植物の種なども入っています。道具はどうやって使っていたか、貝や魚はどうやって獲ってどんな食べ方をしたか、それを解明するために民俗調査をしなければと、勉強していかなければいけないと思ったのです。

これは、鳥羽市にある弥生時代後期から古墳時代の白浜遺跡の露出した貝層です(写真2)。この人の高さが183cmなのですが、手で示したところに薄い貝層が入っているのがわかります。発掘調査ができれば、貝層から土ごと取り出して選別していくのですが、残念なことこの遺跡はその性質

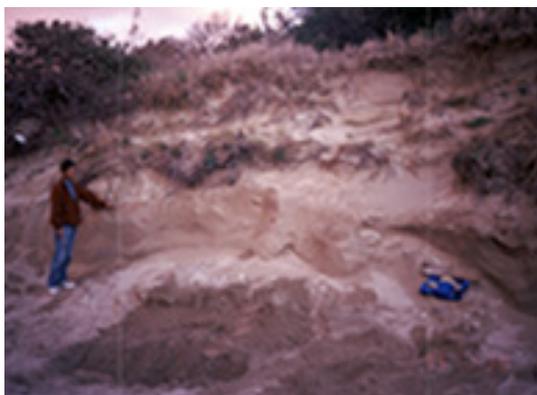


写真2 三重県鳥羽市白浜遺跡

上、崩壊が進んでいました。表面には土師器だけでなく、アワビや魚骨が見えていました。

次にお見せするのは愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査した、稲沢市にある一色青海遺跡から出土した魚骨です。

弥生時代中期から後期の遺跡で、灰などを廃棄した土壌から出土した魚骨です。マダイとスズキの骨が目立ちますが、その他にもフグの歯も出土しています(写真3・4)。皆さんが目にするフグ、とくにトラフグは既に歯が取ってあるのであまり見ないと思いますが、これがフグの歯です。こういうものも遺跡から出土します。ということは、弥生時代の人びとは食べていたということになります。もう一つ、海水魚と一緒にナマズやドジョウ、フナ、コイ、アユなどの淡水魚の骨が出土しています。今の稲沢市ですから、川魚も食べていたことがわかります。

では、どうやってこれらを捕獲していたのでしょうか。海の魚も川の魚も鳥の骨も入っているわけですから、どうやって獲ったのかということを考えていったときに、土壌に廃棄された層によって季節が分かれるということがわかりました。例えば、私たちは毎日ゴミをゴミ箱に捨てます。一昨日のゴミの下に、今日のゴミはありません。一昨日があって、昨日があって、今日があって、明日があるわけです。ゴミ箱の中で、ゴミはどんどん上に堆積していきます。

この層ごとに調べていくと、季節性がわかってきました。渡り鳥のマガモやオナガガモが飛んでくる時期というのは決まっていますから、カモの骨を含む層の上下に何が入っているかで魚を取った時期が判明するのです。ここで鍵になるのが、カモが飛来し人が猟をするのがいつかということです。岐阜県海津市にあるお千代保稲荷で鴨



写真3 愛知県稲沢市一色青海遺跡  
出土魚骨(スズキ・マダイ・フグなど)  
所蔵:愛知県埋蔵文化財センター



写真4 愛知県稲沢市一色青海遺跡  
出土魚骨(ナマズ・アユ・ウナギなど)  
所蔵:愛知県埋蔵文化財センター

鍋が始まるのは、大体、鴨「鍋」ですから、寒い時期に決まっています。稲が穂を垂れてきて、それをついばむようになる時期ですよ。となると、「ああ、秋から冬にかけてか」ということになります。これを実態として調べるのが、民俗調査なのです。

私の研究テーマの中にもう一つ、骨角器があります。漁具としての骨角器です。シカの角で銚をつくったり、釣針をつくったりします。足の骨を使ってヤスをつくったりします。古墳時代に鉄で漁具がつくられるようになるまで、骨や角は貴重な材料でしたし、近代になっても疑似針をマッコウクジラの歯や牛の角を使ってつくっていました。

考古学と民具学の共通点はモノを通して歴史を研究することです。図面を描いて比較するというのも共通しています。図面を描くことは、絵を描くということだけでなく、1つのモノをよく観察することなのです。私が最初に実測した民具は、下駄でしたが、その次に描いたものが四国の仁淀川のカニカゴでした。モクズガニを獲る釜です。この図面を描くには、本当に時間がかかりました。カゴを動かしたりすると、カゴの形が変わってしまいます。そういう民具を描くことは、先ほど話題に挙げた骨角器などの考古資料を実測するのはずいぶん違うのです。地中から出土する埋蔵文化財は軟質のものが少ないのです。今でこそ、カゴや布、木製品が数多く検出されるようになりましたが、土器や石器など、道具の一部分であるものもたくさんあります。漁具の銚やヤスも柄が装着された状態で発見されることは稀です。ましてや、釣針の糸や漁網の網は、日本ではなかなか出土することがありません。

もう一つ、私がとても気になる道具が、漁網です。漁具ばかりで恐縮なのですが、この漁網は遺跡から出土すると、土製の錘だけになります。これは、愛知県豊田市梅坪遺跡から出土した考古学では土錘と呼んでいる、網の錘です(写真5)。これを見ていただくと、何の錘か一向にわかりません。大きさも、10cmぐらいあるものもあれば、もっと小さい、1cmもないような錘もあります。これが遺跡から出土しても、どんな網の錘なのか記載している報告書はほとんどないのです。

私は土錘を実測、撮影する際は横向きに置きますが、考古学の報告書を見ていただくと、その多くが縦に配置してあります。機会があるたびに言い続けているのですが、未だに縦に配置されているので、残念だと常々思っています。



写真5 愛知県豊田市梅坪遺跡  
出土土錘 所蔵:豊田市

この表1を見ていただくと、梅坪遺跡の土錘の場合は、大体同じような数値に集まっていることがわかります。3～5センチぐらいの細いものです。おそらく全部、刺網の漁網錘です。刺網というのは、魚が頭を網の目にキュッと突っ込んで、捕獲する網です。



表1 梅坪遺跡出土土錘法量分布

次に、この写真を見ていただくと、どれが何網の錘かわかりますか(写真6)?これは漁師さんからいただいたり、漁村や浜を歩いていて拾ったりした網の錘です。例えば、一番左側の1番は、コイの刺網、2番がアユの

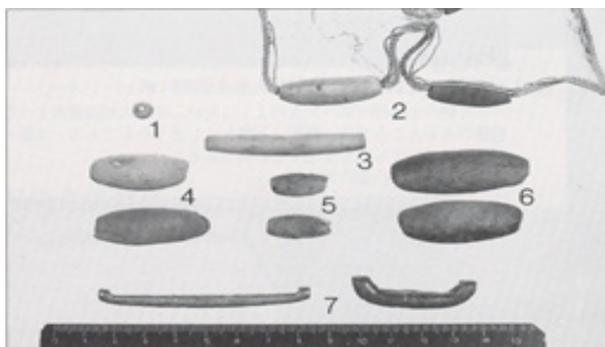


写真6 いろいろな漁網

刺網、3番がシラウオの刺網、4番がボラの刺網、5番がボラの浮刺網、6番がカレイの刺網です。7番は鉛でできている投網の錘です。これが遺跡から出土しても、明確にわかるのは7番だけです。これは「鉛の比重が大きいから、一気に沈む投網の錘だ」とわかると思います。

そこで、昔は漁網錘を自分で作っていたという漁師さんを探しました。そして、もう一回作ってもらおうよ、お願いするのです。

次にお見せするのは、三重県長島町の清水清さんをお願いして撮影した記録です。ススキを軸にして粘土を巻き付けて丸くし整形し、乾かします(写真7)。乾いたら、タキモノを集めてきて焼くのですが、灯油缶の内面に粘土を塗って、その中でタキモノを燃やし、その上から乾かした土の錘(イワ)を入れて、そのまま上からタキモノをさらに入れて焼きます(写真8)。本当にこれでいいのかと思いましたが、見てください、遺跡から出たのと同じ色になって焼き上がります(写真9)。



写真7 イワを成形する



写真8 イワを焼成する



写真9 焼き上がり



写真10 橘屋のイワ



写真11 イワを焼成する(橘屋)



写真12 イワを焼成する(琵琶湖)

この写真は、海津町(現在の海津市)で土錘(イワ)売っていた橘屋という漁具店です。もちろん今はありません。こうやって漁網錘を売っていました(写真10)。この方は七輪で焼いていました(写真11)。

これは、琵琶湖で作ってもらったコイの刺網の錘です(写真12)。この小さい粒々が土錘です。「イワを一升作ってきたら焼いてみよう」と言われて、粘土を手に入れて一生懸命こねて丸くして作って行き、焼いてもらいました。

竹製漁具の筥も、もともと漁師が自分で作るものでしたが、その作る技術も使う記憶もますます消えつつあります(写真13・14)。

先ほど船のお話がありました。船もそうです。和船を使う機会も少なくなり、木曾三川を考えても、船大工は長良川に2軒だけになってしまいました。



写真13 ウナギ釜を作る(長良川、岐阜県羽島市)



写真14 釜でウナギを獲る(長良川、岐阜県羽島市)



写真15 愛知県立田村鵜戸川の地曳網(大網)



写真17 イワを保存する



写真16 アユの刺網(長良川、岐阜県羽島市)

これは地曳網の写真(写真15)ですが、地曳網が使えるようになったのがいつからか。集団で船を出して、皆で曳く組織力が必要な漁具で、個人操業ではできません。古墳時代の海浜部の遺跡からは、大きな土鍾が出土します。土鍾には曳いた痕跡があり、曳網であることがわかります。このように、モノを分析することによってわかることがあります。

これは、アユを刺網で獲っているところです(写真16)。先にお話した梅坪遺跡の土鍾がまさにこれです。この写真は、破れた刺網から鍾だけとって保存している様子です(写真17)。漁港では、よく土の鍾を拾ったものです。遺跡から出土するときには、こういう状態のものも出てくるわけです。そうすると「これは1つの網だ」と勘違いすることもあります。だからこそ、民俗調査では、日頃から観察することがとても大切です。

## ■これからの視点

これまでご紹介した道具はいつから使っているのかというと、基本的な漁具の多くは縄文時代や弥生時代に遡ります。素材は変わっても、同じような形で作られ長い間使われてきた道具です。これらの写真を撮影したのは、今から30年も前ではありません。20数年前にはまだこの記録が撮影できたのですが、こういう長い歴史に培われた文化や道具が一気になくなりました。

急激な変化に、なかなかついていけず、今私に何かできることがあるのかと最近は悩んでしまいます。私の民具研究や民俗調査というのは、成果を考古学研究の中で活かしていくためにというのが最初の出発でした。部分としてしか出土しない考古資料を解明するための手段の一つでした。

ところが、漁具だけでなく織物の道具や生活道具、さまざまな民具に調査を広げて続けていると、考古資料とか民具とか分ける必要を感じなくなるのです。さらに、人が生きるために使う道具、その素材、自然は全部つながっていて、「生きる」ために人びとが長い間で培ったすべてのことを、次世代に伝えなくてはと思えてきたのです。

以前に、織物の展覧会を企画したことがあります。日本列島においては、織りの技術より前に、編む技術が先行してありました。この「編む」と「織る」は同時並行で暮らしの中で使われ続けます。機械化が進む近代にあっても、どこかで連綿とその古い技術は残って今に至ります。道具という観点では、考古資料、民具と分けて言う必要はないと思っています。

最近、木曾川に隣接する職場にいますので、天然記念物イタセンパラを飼育展示する機会を得て、魚類や河川を研究する研究者の皆さんと話す機会が多くなりました。自然科学を研究する皆さんが見る「人間の暮らし」という新しい視点を、今これまでの蓄積に加えようとしています。

これから私たちは何をしなければいけないのか。モノとそれをめぐる記録の素材を、学芸員として私は集めてきました。学芸員というのは専攻分野だけを勉強するだけではやっていけません。地域に関わる文献資料や自然、考古資料、民俗資料、有形無形のもの掘り起こし、文化財として守っていかなければなりません。

そういうものを総合的に捉えた上で、私たちの歴史を明らかにしていかなければなりません。1つの分野ではなくて、総合的に、多くの分野で構成した方が良いというのを強く感じるようになりました。

私が現在仕事をしている資料館には、大正時代の建物があります。そこには、いろいろな木

材が使われています。では、そういう木材をどう運んだのか。上流から木曾川を使って流送してくるわけです。そうすると、物流の上で川が非常に重要であることがわかります。一方で、自然環境を人がどれだけ活用したかということだけでなく、自然環境の側からの視点も大切です。人の暮らしに関わらず、自然環境は変化するからです。

身の回りの自然環境の中で人がどう生きて、道具を作り、どう使い、そして、今どうなったのか。現在、非常に早い速度で時代が変わってきています。そのような今だからこそ、「生きる」ということを、これまで調査にご協力いただいた皆さんの生きる知恵を、自然やモノ、道具を通じて得た歴史観を子どもたちに伝えていきたいと思っています。

最後に、伝えることの意味ですが、歴史というのはお金で買えません。消えてしまった古い道具も記録も買えません。だからこそ、これを守っていくことが、私たち学芸員の仕事ではないかと思っています。

ありがとうございました。

## 参考文献

下野 敏見編

1997 『西之表市の民俗・民具(種子島民俗調査報告書 第一集・二集)』西之表市教育委員会。